「他者のための行為」が引き起こす葛藤に関する考察

― 物語からみる小学生児童の学校生活場面の分析より ―

A Study on Conflicts Caused by “Acts for Others”
-An Analysis of Elementary School Children’s School Setting from the Perspective of Stories-

村　井　あかり*
Akari MURAI

要　約　本研究では，物語において「他者のための行為」がどのように描かれているのかを明らかにすることを目的として，「ヘンゼルとグレーテル」，「アリとキリギリス」，「桃太郎」の 3 作品を分析した。物語において描かれる「他者のための行為」は，第三者を傷つけるなどの葛藤を引き起こしていると考えられた。葛藤に関する仮説として，(1)「関係性や罪悪感の心理描写の有無によって，行為者の行いは非難されない可能性がある」，(2)「他者に「善」を求めようとする行為が他者のために善いとは限らない」，(3)「物語のスタートとゴールが変化することで，行為者の立場が大きく変化する」，の３つの論点を抽出した。また，小学生女子児童に非構造化面接を行い，得られた語りから事例を作成した。事例の分析結果と物語から抽出された論点を比較したところ，いずれの論点も，小学生児童の事例分析の結果と共通すると考えられた。

キーワード：ヘンゼルとグレーテル，アリとキリギリス，桃太郎，非構造化面接，葛藤

Abstract　The purpose of this study was to ascertain how “acts for others” are depicted in stories. Three works, “Hansel and Gretel,” “The Ant and the Grasshopper,” and “Momotaro,” were analyzed. The “acts for others” were thought to cause conflicts, such as harming a third person. The following three points were identified: (1) “The actor may not be blamed depending on the relationship and the psychological depiction of guilt,” (2) “An act that seeks “good” from others may not be good for others,” and (3) “The actor's position changes when the start and goal of the story change.” These points served as hypotheses regarding conflict. In addition, unstructured interviews were conducted with elementary school girls, and cases were developed. When the results of a case study analysis were compared to the points identified in stories, all of the points were common to the case studies.

Key words：Hansel and Gretel, The Ant and the Grasshopper, Momotaro, Unstructured interview, Conflict

I.　問題と目的

これまで，社会の中で他人と関わったことがある人であれば誰しもが，他者のために行動したことがあるはずである。電車で席を譲る，泣いている友達に声をかけるといった「思いやり行動」だけでなく，親に頼まれた手伝いや給料がでる仕事も，その動機が何であれ，他者のための行動と言えるだろう。ほかにも，意図せずに行ったことが実は誰かのためになっていた，ということもあるかもしれない。社会が成り立つためには，それぞれが個人の利益を追い求めながらも，他者の利益となる行動をすることが必要不可欠だと思われる。

人が社会の中で生きていく上で当たり前に「他者のための行為」を行っているのあれば，形を変えながらも古くから親しまれてきた昔話やメッセージ性の強い寓話においても，「他者のための行為」が描

*　人間生活学研究科人間発達学専攻
Division of Human Development, Graduate School of Human Life Sciences

かれているのではないだろうか。Bettelheim（1976）は，昔話について「人間の内的な問題について教え，社会の形態に関係なしに，困難な立場からぬけでる解決法[1)]」を示すものだと述べている。物語において「他者のための行為」が描かれているとすれば，それがどのように描かれているかを明らかにすることで，人間関係の原型を知ることができる可能性がある。

ところで，日常生活の中では，他者のためを思って行った行動が相手に良いと感じてもらえないことがある。または相手には良いと感じてもらえたとしても，周囲から悪い行いだと評価されることもあるだろう。例えば，他者のためにつく「思いやり的嘘[2)]」（White lie）は対象である他者にとっては嘘をつく行為が思いやりであり，利他的な側面をもつが，別の他者にとっては騙しとなることもある。また，嘘をつくという行為そのものが非道徳的であると評価されることも少なくない。他にも，「教師が話をしている時に，話しかけてきた友達の話に相槌を打っていたら，教師に叱られた」場面では，相槌を打っていた児童は，友達のために話を聞いていたつもりであっても，教師から見たときには話を聞いていないという集団のルールから逸脱した行動となるだろう。

このように，現実の社会では「助けようとする人と助けられる人」の二者関係では完結せず，「それを評価する人」などの第三者が存在し，葛藤が引き起こされる場合があると想定する。物語においても，「他者のための行為」によってこうした葛藤が引き起こされる場面が描かれているのかを明らかにし，小学生女子児童の語りから生成した，小学生の学校生活場面の事例と比較し，分析を行う。他者のための行為が葛藤を引き起こす背景について，物語の分析と小学生児童の事例分析の両側面から考察することを目的とする。

本研究で用いる言葉の定義を Table1 に示す。

II. 方法

1. 対象とする物語

発生源が日本と他国のものを含むこと，100 年以上にわたって伝承されてきた作品であることを選択基準とし，グリム童話，イソップ物語，日本の昔話を対象とする。ほぼすべての話に目を通し，本研究に関連があると思われる，グリム童話より「ヘンゼルとグレーテル」，イソップ物語より「アリとキリギリス」，日本の昔話より「桃太郎」の３作品を抽出する。

2. 小学生女子児童への非構造化面接

（1）対象

都内小学校に通う４年生の女子児童１名を対象とする。

（2）調査期間

2018 年 11 月～2019 年 1 月の期間に週に 1～3 度の割合で実施する。1 回あたり平均約 15 分である。

（3）調査方法

対象者には，先入観により内容が変化してしまうことを防ぐため，研究の目的を明かさず，「学校であった出来事を話してほしい」という質問にとどめ，非構造化面接を行う。事前に対象者本人及び保護者に，IC レコーダーによる録音の許可，また論文掲載の承諾を得て調査を行う。

（4）事例作成

得られた音声データのうち，「他者のための行為」に該当すると判断したものをすべて選び，逐語録を作成する。逐語録から日常の学校生活で見られた「他者のための行為」を事例として取り上げる。なお，児童の名前や教師の名前，施設名等，個人を推

Table 1　Definition of terms

用語	定義
他者のための行為	他者の利益を目的とする行動や他者の利益となる行動
行為者	「他者のための行為」を行う人物
第三者	「他者のための行為」が行われる場面において，直接の当事者ではないが，行為者の行為に何らかの影響を与える人物やその人物の考え
援助の対象	「他者のための行為」において利益を得ると思われる人物
葛藤	「他者のための行為」が行われる場面において，第三者が不利益を被ると思われる状況

論できる可能性のある固有名詞はすべて仮名に置き換え匿名化する。

3. 分析の手続き

（1）「他者のための行為」の抽出

対象とした物語3作品と，小学生女子児童への非構造化面接より生成した 20 事例を繰り返し読み，「他者のための行為」を抽出する。「他者のための行為」は「他者の利益を目的とする行動や他者の利益となる行動」と定義し，利他的動機があることと，結果として他者の利益となっていることのいずれか，またはその両方の行為が対象となる。

（2）論点の抽出と比較

物語より抽出した7つの「他者のための行為」と，小学生女子児童への非構造化面接より生成した 20 事例（以下，小学生児童の事例とする）より抽出した 43 の「他者のための行為」の行為の詳細を明らかにし，「他者のための行為」が何らかの葛藤を引き起こしている可能性を検討する。それぞれ，葛藤に関する仮説を論点として取り上げる。抽出された論点の類似性に着目して，物語と小学生児童の事例を比較し分析する。

III. 結果と考察

対象とした物語3作品より7つの「他者のための行為」と，小学生女子児童への非構造化面接から生成した20事例より43の「他者のための行為」を抽出した。「他者のための行為」が何らかの葛藤を引き起こしている可能性を検討したところ，以下の結果が得られた。それぞれ，葛藤に関する仮説である論点を抽出し，抽出された論点の類似性に着目して，物語と小学生児童の事例を比較し分析した。本論文では，小学生児童の事例の論点については，物語の論点と類似のもののみを取り上げた。

物語のあらすじと事例中の下線　　は「他者のための行為」と思われる行為者の行為，事例中のゴシック体表記の部分は，事例に登場する人物の発言を示し，二重括弧『』にて挿入する。また，桜井[3]（2002）を参考に，文脈上省略されている語の補足を（　）で挿入する。また，本論文ではページ数の都合上，事例については簡略化して記述した。

1. ヘンゼルとグレーテル[4]

（1）あらすじ

森の端に住んでいた貧乏な木こりの家族（父・継母・兄・妹）は，飢饉によってその日食べるパンすら手に入らなくなる。途方にくれる父に，継母は子どもたちを森の中に捨てることを提案する。一度目は，兄のヘンゼルと妹のグレーテルは自分の家へ帰りつくことはできたが，二度目に置き去りにされた際は，帰り道がわからず「お菓子の家」へたどり着く。その家の魔女に二人は捕まり，魔女は二人を食べようとするが，グレーテルは魔女をパン焼き窯に入れて焼き殺す。二人は魔女が持っていた宝石などを持ち出し，家に帰る。継母はすでに死んでおり，父と３人で幸せに暮らす。

（2）作品における「他者のための行為」（Table2）

（2-1）行為Ⅰ／子どもたちを森に棄てる（継母）[1]

作品における「他者のための行為」として，継母による，子どもたち（ヘンゼルとグレーテル）を森に棄てる行為を抽出した。子どもを棄てるという行為そのものは残酷なものである。しかし，状況は食糧難であり，子どもを棄てることで食い扶持が減り，結果として夫である父と自身の命は助かることになることから，同定した。梅内（2002）は，継母の行動は「飢餓という極限状態」においてやむを得ない選択肢ではないかと指摘する[5]。両親が子どもを優先してパンを与えても，両親の死後，子どもたちは自活できずに死ぬ。両親と子どもが食べ物を分け合っても家族全員で飢え死にするタイミングが早まるが，子どもたちを追い出した場合，全員で食べ物を分け合ったときよりも両親だけは長く生き延びることができる。継母の行為は，飢饉という非常事態のもと行われ，父を助けることができ，「想像以上に不合理だとは思われない（梅内，2002）[5]」ともいえる。

（2-2）行為Ⅱ／継母の提案に抵抗し子どもたちの身を案じる（父）

継母は子どもたちを森へ捨てることを提案するが，父は，そんなことはできない，森のけだものが子どもたちを八つ裂きにしてしまうと抵抗する。父は，子どもたちを棄てることを決めた後も，「だが，どうかんがえても，子どもたちがかわいそうでならな

[1] （　）内は行為者とする。

いなあ」とこぼす。また，1 回目に森へ置き去りにした子どもたちが自力で家まで帰ってきたときの父の様子として，「おとうさんは，子どもたちをだまかして，おいてきぼりにしたのが，きになってしかたがなかったところでしたから。」と描かれており，動機の観点から同定した。

（2-3）行為Ⅲ／子どもたちを森に棄てる（父）

子どもたちを森へ棄てるという継母の提案に抵抗するが，結局，「四人とも，うえ死にしなきゃなりゃしない。」と継母に言われ，子どもを棄てることを決心する。継母の，子どもたちを棄てるという行為Ⅰが結果として父の命を救うように，父の決断も継母を救うこととなることから同定した。

（2-4）行為Ⅳ／子どもたちに「お菓子の家」を提供する（魔女）

「子どもたちのくるのを待ちぶせしている悪ものの魔女」の目的は，子どもを食べることである。だが，一時的であるにしろ，けだものに八つ裂きにされるかもしれなかった子どもたちを保護し，食料を与えた。太田（2006）は，「お菓子の家」について，「自分の乳を子どもに与える，母親のシンボル」であり，ヘンゼルとグレーテルが少しも警戒することなく食べている様子から「よい母親」であると考察する[6)]。目的は子どもを食べることだが，子どもたちにとっては「母親」のような場所を提供したといえることから同定した。

（2-5）行為Ⅴ／魔女をパン焼き釜に入れて焼き殺す（グレーテル）

グレーテルは，魔女を焼き殺したことで，自身の命と兄の命を救った。このタイミングで魔女が死んでいなければ，二人とも魔女に食べられており，結果より同定した。

（2-6）行為Ⅵ／魔女の宝石を持ち帰る（ヘンゼルとグレーテル）

魔女の宝石を家へ持ち帰ることで，ヘンゼルとグレーテルは父と三人で「うれしいことばかりで，いっしょにくらしました。」という結末を迎え，飢饉による食糧不足は解消される。家族に幸せをもたらしたという点で同定した。

（3）小学生児童の事例との比較（論点の類似性に着目して）

（3-1）論点：罰を受けない父

継母と父による子どもたちを森へ棄てる行為は，夫婦の互いの命を救う「他者のための行為」ではあったものの，子どもたちを犠牲にするという葛藤を引き起こしている。魔女の宝石を目にすることなく死を迎え物語から退場するという結末を迎えた継母に対し，父は生きて子どもたちと幸せに暮らすという父と母の結末の違いより論点を抽出する。

梅内（2002）は，父について，継母の考え方に最終的には同意し子どもたちを森に棄てていることから，「父親も「子どもの置き去り」に関しては，共犯者である」と言及する[5)]。父の行為は，行動にのみ焦点を当てれば，継母と同じ行為だが，結末については，継母は「悪人」，父は「善人」としての終わり方だったともいえる。作品内において，なぜ父は「善人」なのだろうか。

ところで，継母について，第一版（1812）では「実母」とされているが，第七版では「継母」に変えられている（変更されたのは第四版である[5)]）。実母は子どもを棄てるようなことはしないとグリムが判断したという推測[5)]や，残酷さを軽減するため[7)]と考えられている。タタール（1990）は，継母は，あらゆるおとぎ話の中で，「一貫して悪の源という立場」にあり，「継母」という呼び名そのものが，「その人物に邪悪な女というレッテルを貼り付ける」と指摘する[8)]。童話の世界において，登場した瞬間から，継母はすでに悪役であるのに対し，ヘンゼル

Table 2　“Acts for the Benefit of Others” in “Hansel and Gretel.”

	行為者	他者のための行為	援助の対象と想定される利益
Ⅰ	継母	子どもたちを森に棄てる	父・飢え死を回避
Ⅱ	父	継母の提案に抵抗し子どもたちを案じる	子どもたち・身の安全
Ⅲ	父	子どもたちを森に棄てる	継母・飢え死を回避
Ⅳ	魔女	子どもたちに「お菓子の家」を提供する	ヘンゼルたち・けだもの等から保護
Ⅴ	グレーテル	魔女をパン焼き釜に入れて焼き殺す	ヘンゼル・魔女に食べられる状況を回避
Ⅵ	ヘンゼルとグレーテル	魔女の宝石を持ち帰る	父・飢饉による食糧不足の解消

とグレーテルの父は「実父」という立場であり，「継母」とは対立構造をとる。家族の続柄や立場が，父を「善人」にさせると考えられる。

次に，父と子どもたちの関係に着目する。魔女のもとから家へ帰ると子どもたちは「おとうさんのくびったまへかじりつきました」などの，父が子どもたちから慕われている描写はいくつかあるが，子どもたちが継母を慕う様子は出てこない。子どもたちと父の関係性が良好であることも要因と考えられる。

また，タタール（1990）は，シンデレラの父親（自身の新しい妻と連れ子がシンデレラをいじめる）や白雪姫の父親（白雪姫を殺めようとする新しい妻の策略を阻止しようとしない）を例に挙げ，童話の世界の父親は，子どもの幸福に「まったく無頓着」だと指摘する。にもかかわらず，「最後まで優しい人物として描かれる理由は，この恵み深い無視が，妻の極悪非道な仕業にくらべればまだまし[8)]」だからである。ヘンゼルとグレーテルにおいては，父は，母の提案に対し「どうしても言うことを聞かなければならないことになりました」と，仕方なく承諾する様子が度々描かれる。つまり，子どもを棄てる計画を立てる継母がいることで，その計画に消極的な父は，継母と「比べて」善人であるといえる 。

最後に，父の心情が細かく描写されていることに注目する。先述の通り，父は子どもたちの身を案じ，森へ棄てたことに罪悪感を覚えている描写が度々出てくる。継母が子どもを棄てることを提案した際は，「どうしてそんな気になれよう，じぶんの子どもを，森のなかへ置いてきぼりにするなんて。じきにけだものが，ぞろぞろでてきて，子どもたちを八つざきにするにきまってる」と抵抗する。継母の二度目の提案に対しても，「いやな気もちになって，そんなことするよりか，おれがいちばんしまいにほおばるやつを，子どもたちにわけてやるほうがいい」と考える。父の子どもたちに対する思いやりは大変わかりやすい。梅内（2002）が父を「共犯者[5)]」だと表現したように，結果は継母と同じく「子どもを棄てる」こととなったが，父の子どもたちを思いやる心情や罪悪感などの心理描写が詳細に描かれることで，父が子どもたちの利益を考えているという動機が強調されることも関係していると考えられる。

以上より，「他者のための行為」が第三者を傷つけるという葛藤場面において，家族続柄，関係性，他者の行為との対比，罪悪感などの心理表現により，行為者の行いは非難されない可能性がある，という論点が抽出された。

（3-2）小学生児童の事例との比較

（3-1）より抽出された論点について，小学生児童の事例である【事例 4 仲間はずれにする】と比較した。

【事例 4 仲間はずれにする】
場面：昼休み
人物：女子児童（A,B,C,D,E,K）

A，B，C，D，E の 5 人は，休み時間に一緒に遊ぶメンバーである。この日の朝，クラスメイトのKが「Aたちと一緒に遊びたい。」とAに声をかけ，Aら 5 人は休み時間にKと一緒に遊ぶこととなる。
休み時間が始まる直前，K以外のAら 5 人は集まって話をする。Aら 5 人はKと一緒に遊びたくないと思っている。BとCは，Kが一緒に遊ぶことに対し，**『えー。』**と言い，Cが**『一回校庭集合ねって（K に）言って、で、体育館行く？』**とAらに言う。Aらは体育館で遊ぶが，Kには遊ぶ前に，グラウンドで遊ぶことにしたと伝える。
休み時間が始まり，Aら 5 人は体育館でおにごっこをして遊ぶが，途中で，A は C に**『K、やっぱりかわいそうじゃない？』**と声をかける。C は**『うん…』**と言いつつ，K を呼びに行くことには反対する。
A は一人で校庭に K を探しに行き，K と一緒に体育館に戻る。Kも交えて 6 人でおにごっこをするが，BはKのいないところで，Aに**『なんでK連れてきたの？』**と怒った口調で言う。

【事例 4】では「他者のための行為」は 6 つ抽出されたが，ここでは A と C の 2 つの行為を取り上げる。A と C は，「仲のいい友人 5 人が一緒に遊びたくないと思っているKに，実際に遊ぶ場所とは別の場所を伝える」という行為を行う。これは，仲のいい 5 人で遊ぶことができるという点で「他者のための行為」だが，K は仲間はずれにされるという葛藤が引き起こされている。

「ヘンゼルとグレーテル」においても「夫婦が飢え死にしないために，子どもたちを森に棄てる」という行為によって，子どもたちは家から追い出されるという葛藤が引き起こされている。また，「子どもたちを森に棄てる行為」を行った父と継母の描か

れ方が異なるように，「Ｋを仲間はずれにする」という行為を行ったＡとＣも，教師などの当事者ではない人間がこの出来事を見聞きした場合には，ＡとＣで異なる印象をもつと推測される。Ａは『K、やっぱりかわいそうじゃない？』とＣに言うなどの心理表現をしていること，また，Ａは最終的に校庭にいたＫを呼びに行っており，何もしなかったＣの行為と対比されることなどが考えられる。

以上より，「他者のための行為」が第三者を傷つけるという葛藤場面において，家族続柄，関係性，他者の行為との対比，罪悪感などの心理表現により，行為者の行いは非難されない可能性がある，という論点について，小学生児童の事例においても共通する部分があると考えられた。

2. アリとキリギリス

（1）原話二三六「蝉[2]と蟻たち」[9)]

冬の季節に蟻たちが濡れた食糧を乾かしていました。蝉が飢えて彼らに食物を求めました。蟻たちは彼に「なぜ夏にあなたも食糧を集めなかったのですか。」と言いました。と，彼は「暇がなかったんだよ，調子よく歌っていたんだよ。」と言いました。すると彼らはあざ笑って「いや，夏の季節に笛を吹いていたのなら，冬は踊りなさい。」と言いました。この物語は，苦痛や危険に遇わぬためには，人はあらゆることにおいて不用意であってはならない，ということを明らかにしています。

（2）作品における「他者のための行為」

原話においては，「将来のために備えをしておくこと」という教訓があるのみで，「他者のための行為」は抽出されなかった。一方，以下のような現代日本の本の中には「他者のための行為」が登場するものもある。

> 「きりぎりすさん。あなたは，なつのあいだ，なにをしていたのですか。「はい。うたっておどって，あそびくらしました。」「それはいけない。わたくしたちは，そのとき，あせを ながして，はたらいて いたのですよ。」ありたちは，こういって，きりぎりすに，たべものをわけてあげました[10)]。

ここでの「他者のための行為」は，「アリがキリギリスに食べ物を分け与える」であり，キリギリスの命を救う結果となっていることから抽出された。渡（2014）によれば，現代日本の子ども向けの本においてはほぼ，アリがキリギリスを助けない原話通りのものか，アリがキリギリスを助けるという「弱者への慈悲というモラル」が含まれたものの二つに分かれている[11)]。

（3）小学生児童の事例との比較（論点の類似性に着目して）

（3-1）論点：教訓を守る手本となるアリ

原話のアリは，キリギリスを見殺しにするにもかかわらず，教訓を守る手本となる存在であり，社会通念上「善」とされていることを行ったといえるが，キリギリスを見殺しにするという葛藤を引き起こしている。「他者のための行為」は抽出されなかったが，「社会の善を守る」ことを「他者のための行為」として考察する。論点は，手本となるアリがキリギリスを見殺しにしている点に着目して抽出する。

ルソーは「エミール」において，「蟻と蝉」を批判している[12)]。蟻は「輝かしい役割」であり，子どもが「蟻を見習う」のは当然だが，蟻は蝉（キリギリス）を「拒絶したうえに，嘲笑うことを教えている」と指摘する。作品内において，アリはキリギリスよりも強者であり，キリギリスはアリを非難することはできない。アリが食糧を持っているからだけでなく，アリが物語内の教訓を守る，善であり正しい存在であるためだ。正しく在るということで，力を持ち相手よりも優位に立つことができるといえる。また，善であるアリはそれを「いや，夏の季節に笛を吹いていたのなら，冬は踊りなさい。」と，キリギリスに分からせようとするが，キリギリスは結果として飢えをしのぐことができないでいる。自らが善であっても，「善」を他者に求めようとする行為が他者のために「善い」とは限らないという論点が抽出された。

（3-2）小学生児童の事例との比較

（3-1）より抽出された論点について，小学生児童の事例である【事例 13 耳をふさぐ】と比較した。

【事例 13 耳をふさぐ】

[22] もともとは「アリとキリギリス」ではなく「アリとセミ」であり，セミの生息しない北ヨーロッパに話が伝わってから「キリギリス」となったといわれている[11)]。

場面：授業時間内～休み時間
人物：女子児童（D,E,F,L），担任教師

D，E，F の 3 人と L は席が近く，口喧嘩をしている。 音楽の授業時間内となり，クラス全員の前に2人ずつ出て，リコーダーの演奏を行う。D と E が演奏している間，L が耳をふさぎ，顔をしかめる。授業が終わり，休み時間になってから，Lが耳をふさいでいたことを，Fが先頭になって担任教師に伝えに行く。 教師は，F，D，E の話を聞き，教室ではないところでLだけに話をする。Lは泣いて教室に帰ってくるが，D は『なんで（先生は）怒んないの？私たちは発表中，耳をふさがれたんだよ。』と周囲の友達に話す。友達たちは『そうだよね。』と答える。

【事例 13】において，「他者のための行為」として「Fが，DとEの演奏中に耳をふさいでいたLのことを先生に伝えに行く」を抽出した。発表中にLに耳をふさがれて嫌な気持ちになったと思われるDとEのためという動機の点で「他者のための行為」だが，教師に呼ばれて話をした L は泣いて教室に帰ってきており葛藤が引き起こされている。

「アリとキリギリス」においても「将来のために備えておくという教訓を守る」アリの行為によって，キリギリスは飢えをしのぐことができないという葛藤が引き起こされている。また，教訓を守るアリが強者であったように，「人の演奏中に耳をふさぐ行為は良くない」という主張をもつFは正しい存在であり，L はそれに反論できないという状況に置かれている。そして，アリがキリギリスに食べ物を分け与えないという行為によって教訓を分からせようとしたように，Fは教師にLが怒られることでDとEの傷つきを分からせようとしたと考えられる。しかし，LはDたちに謝罪することもなく，泣いて教室に帰ってきており，「善い」結果がもたらされたのかについては疑問が残る。

以上より，「他者のための行為」やそれに準ずる行為が第三者を傷つけるという葛藤場面において，自己内では「善」として完結していても，それを他者に求めようとする行為が他者のために「善い」とは限らないという論点について，小学生児童の事例においても共通する部分があると考えられた。

3. 桃太郎

(1) あらすじ

桃から誕生した桃太郎が，犬・猿・雉を家来にして，鬼が島へ行き鬼を倒す。鬼から得た宝物をもって村に帰る。

(2) 作品における「他者のための行為」

「他者のための行為」として，「鬼退治をし，宝物を村へ持って帰る」行為を村人の利益となっていることから抽出した。

(3) 小学生児童の事例との比較（論点の類似性に着目して）

(3-1) 論点：桃太郎が鬼退治へ行く動機

桃太郎について，物語の骨格は，桃から誕生した桃太郎が家来を従えて鬼退治へ行くというものだが，桃太郎が鬼退治へ行った行為の動機は語られる時代や地域によってストーリーが変容していた。論点は，鬼退治の動機の変容に着目して抽出する。

（発生～江戸後期）

昔話「桃太郎」は室町末期から江戸初期にかけて形成されたものとみられるが，滑川（1981）は，その発生は不明，昔話・民話の本質上，特定の作者は考えられないとし，強いていえば「不特定多数の民衆」が作者であったとしている[13)]。他にも，柳田（1976）は，「賤しい爺と婆との拾い上げた瓜や桃の実の中からでも，鬼を退治するやうな優れた現人神は出現し得るものと，信ずる人ばかりの住んで於た世界」だから発生したのだと述べている[14)]。その後，口承伝承される過程で時代や書き手に応じて様々な意味づけを与えられることとなる。例えば，鬼征伐の際，退治するのではなく相撲で決着をつけるなど，部分的にバリエーションが生まれた[13)]。物語の原型ともいえる，発生当初の「桃太郎」においては，鬼退治の理由は語られていないものが多く，「鬼」＝「悪」の観念が存在するため退治することを当然のこととして疑わない時代に発生したからではないかと考えられている[13)]。江戸後期になると，「桃太郎」は書籍に残されるようになる。この頃の「桃太郎」はより現実感と親しみのあるキャラクターとして描かれ，桃太郎は宝のある鬼が島へただ向かうという，鬼退治ではなく「桃太郎の冒険譚」として大衆の娯楽となる[15)]。

（教育勅語以降）

明治初期にかけて物語の骨子が定着するが，教育勅語（1980）以降に刊行された『教育桃太郎冊子』

では，物語の冒頭で「鬼たちに襲われている庶民の両親と赤子」が描かれ，鬼退治の理由は民を苦しめる鬼を征伐することと提示される。他にも，桃太郎は戦って鬼を征伐するが「その罪をにくみて，人をにくまず」と記される。これらの変容について，子どもは「教訓されなければならない存在者」としてとらえられ，教訓性をもつ読みものがいいとされた時代に突入したため，教訓性が強調されたと考えられる[13]。

（明治末期）

明治末期，国定教科書「尋常小学校国語読本巻一」が文部省から刊行され，その後昭和７年まで十五年にわたって使用されるが，この教科書の最後に「モモタウラ」が掲載される。本文には「オニドモ」「オニセイバツ」という言葉がみられ，この時点で昔話「桃太郎」は勧善懲悪の物語として広く普及することとなった[15]。滑川（1981）は，「モモタウラ」における鬼の大将が降参した時のセリフに着目し，以下のように述べている。

> 「モウ，ケッシテ人ヲクリシメタリ，モノヲトッタリイタシマセン」と，言わせているところである。このことばによって，桃太郎の鬼が島征伐を正当化しているのである。「膺懲の軍」という皇軍の看板が想起されよう。桃太郎の鬼退治は，正義の戦いであるということを鬼側に言わせているのは従来みられなかった叙述である。[13]

鬼の大将が降参した時，「今後はこのようなことをしないと誓う」場面が描かれ，桃太郎は人々を苦しめる鬼と戦ったと位置づけられる。この頃の日本は，満州事変以降の大陸侵攻を侵略思想によるものではなく「聖戦」と意味づけ，「皇軍」は正義の士と呼ばれる時代である。そのような中で掲載された物語であることを鑑みて，出川（2021）は，国定教科書への採用が昔話「桃太郎」を「戦争のための童話」へと変え，戦争のプロパガンダとして浸透させることになったと考察している[15]。

（敗戦後～現在）

敗戦後，アメリカの統治に入ってから，国定教科書は廃止される。軍国主義によって作られた「桃太郎」は，戦後の教科書からその姿を消し，今に至るまで掲載されていない。現代の私たちは，廃止された国定教科書の影響を少なからず受けつつ，ラジオ・絵本・テレビを通して「桃太郎」のイメージを作っているが，「桃からの誕生，黍団子，犬・猿・雉のお供，鬼が島征伐，宝物を持ち帰るという構成要素は不変の部分[13]」である。

「鬼退治の動機」に着目して，その変容をたどってみると，昔話「桃太郎」は人々に対する戒めや教えを込めて生まれた話ではないと分かる。語り継がれていく中で，時代背景と書き手の意図によって変容している。教育勅語以降に加えられた，物語の冒頭の「鬼たちに襲われている庶民の両親と赤子」の描写と，明治末期の教科書に掲載された，鬼の大将が降参した時の「今後はこのようなことをしないと誓う鬼」の描写に着目する。

まず，物語の冒頭の「鬼たちに襲われている庶民の両親と赤子」の描写によって，物語の起点が「桃太郎誕生」から「桃太郎誕生前」に移動している。「過去」が描かれることで，「鬼から人を守る」という，桃太郎が鬼を退治する理由が明確になっている。この改変は教訓性を強調するために行われたと考えられるが[13]，鬼退治の動機が利他的であることにより，同じ鬼退治であっても「桃太郎」は「教訓性をもった人物」となった。

次に，鬼の大将が降参した時の「今後はこのようなことをしないと誓う鬼」の描写によって，物語の終点が「降参する鬼」へと移動し，鬼は人々を苦しめる悪であることが明記される。この改変は，日本軍の大陸侵攻を「聖戦」と意味づけるためのプロパガンダによるものと考えられ[15]，桃太郎は正義の士でなくてはならず，そのために「人々を悪から守る」という正当な理由が必要だったと思われる。

教訓的な読み物としての「桃太郎」も，戦争のための「桃太郎」も，国民である読み手を意識して改変されている。物語の読み手は「第三者」とも考えられるが，鬼退治を目撃する読み手は，鬼退治をする理由の中身によって，鬼退治が正義かそれともただの冒険なのかを判断するといえる。物語を始めるスタートと物語を終えるゴールが変化することで，「動機」が生まれ，行為者（桃太郎）の立場も大きく変わるという論点が抽出された。

（3-2）小学生児童の事例との比較

（3-1）より抽出された論点について，小学生児童の事例である【事例 17 聞き出す】と比較した。

【事例 17 聞き出す】
場面：着替えの時間
人物：女子児童（G,H,I,M）

体操服に着替えをしなくてはならない時間になる。G は着替えをしようとし体操服を取りに行くが，ラックにかかっているはずの体操服が見当たらず，探す。G が傍にいた H に，自分の体操服がラックからなくなったと話すと，H は G の体操服を探すのを手伝う。少ししてから，G はラックではなく備品を入れるかごの中から自分の体操服を見つける。
H は仲のいい I に，G の体操服がなくなったことを話し，G，H，I の３人で，M が G を嫌っていることから「体操服を隠したのはクラスメイトの M ではないか」と話す。
H はMのところへ行き，『ハンガー（体操服），やった（隠した）？M、G（のこと）嫌いなんでしょ？』と話しかける。H は『うちらも（H のこと）嫌いだから、教えて。』と M に言い，M が G の体操服を隠したのかどうか，H を嫌いだという嘘をついて聞き出そうとする。M は『うちやったんだよ。』と H に答える。
H は体操服を隠したのが M だったことを G に伝える。G は，H の M への聞き方について『えーひどーい。』と言い，と同時に，「体操服が見つかったから先生に M のことを言わなくてよい」と H に言う。
体操服を M に隠された翌日以降，G は M の体操服だけをラックの端に寄せ，まとめてある他の体操服とあからさまに別にする。M は G が自分の体操服を勝手に移動させていることを知り，ますます G を嫌いだと周囲に言うようになる。

【事例 17】においては「他者のための行為」は 6 つ抽出された。6 つの行為のうち，G は体操服を隠した人物を知りたいだろうと考えたHが，Gのために M から体操服の件を聞き出す行為を取り上げる。この H の行為は，動機の点から「他者のための行為」であるといえるが，M にとっては H に嘘をつかれるという状況が生まれており，葛藤が引き起こされている。他の 5 つの「他者のための行為」については割愛し，ここでは事例の切り取られ方に着目する。

【事例17】は「Gの体操服がなくなる」という状況からスタートする。体操服は無事に発見されるが，「隠した「犯人」を見つけて先生に言わなくてはいけない」と考えた H は，M のところへ直接聞きに行く。結果，「犯人」が判明するが，G は「先生にMのことを言わなくていい」と言う。話はここで終わらず，その翌日以降，GはMの体操服を勝手に移動させるようになり，MはますますGを嫌うというところがゴールとなる。

「桃太郎」は時代に合わせてストーリーが変容しており，物語のスタートが「鬼たちに襲われている庶民の両親と赤子」の描写となることや，ゴールが「今後はこのようなことをしないと誓う鬼」の描写となることで桃太郎の立場が変化すると考えられた。同じように，「MがGに嫌がらせをされている」場面がスタートであった場合，「体操服がなくなる」というのはMの仕返しであり，GとMの喧嘩に過ぎないと片付けられていた可能性もある。または，【事例 17】のゴールである「GがMの体操服を勝手に移動させる」という行為から次の話がスタートすれば，G は体操服を隠された「被害者」ではなく，体操服を隠した「犯人」となる。話のスタートとゴールが変化すると，G の立場は逆転すると考えられる。

以上より，「他者のための行為」やそれに準ずる行為が第三者を傷つけるという葛藤場面において，物語を始めるスタートと物語を終えるゴールが変化することで，「動機」が生まれ，行為者の立場も大きく変わるという論点について，小学生児童の事例においても共通する部分があると考えられた。

4. 総合考察

「ヘンゼルとグレーテル」，「アリとキリギリス」，「桃太郎」の 3 作品を分析し，そのうちの 2 作品において「他者のための行為」を抽出した。物語において描かれる「他者のための行為」は，第三者を傷つけるなどの葛藤を引き起こしており，葛藤に関する仮説として 3 つの論点を抽出した。「家族続柄，関係性，他者の行為との対比，罪悪感などの心理表現により，行為者の行いは非難されない可能性がある」こと，「自らが善であっても，「善」を他者に求めようとする行為が他者のために「善い」とは限らない」こと，「物語を始めるスタートと物語を終えるゴールが変化することで，「動機」が生まれ，行為者の立場も大きく変化する」ことの３つの論点が得られた。

また，いずれの論点も，小学生女子児童への非構造化面接より生成した事例分析の結果と共通すると推測された。これにより，長い間伝承されてきた昔話や寓話には，人間関係の本質が描かれているのではないかと考えられる。

人間関係は人の数だけ存在すると思われるが，人間関係のパターンには普遍的な形があるのではないだろうか。日々の生活の中でそうした人間関係の葛藤を，無意識に「よくあることだ」と片付けているともいえるが，葛藤による他者の傷つきがあるとすれば見過ごせない問題だと考える。今後は得られた仮説を検証するため，対象年齢を広げて調査をしていきたい。

謝辞

本研究の調査にご協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

引用文献

1）Bruno Bettelheim, *The Uses of Enchantment: The Meaning and Importance of Fairy Tales* (New York: Random House, Vintage Books. (1977)
（波多野完治・乾侑美子訳「昔話の魔力」評論社，1978）
2）近藤綾・淺田英恵・水口啓吾・杉村伸一郎：幼児の思いやり的嘘と実行機能との関連，幼年教育研究年報，33，41-48（2011）
3）桜井厚：インタビューの社会学，ライフストーリーの聞き方，せりか書房（2002）
4）グリム著，金田鬼一訳，グリム童話集完訳，岩波書店，1979
5）梅内幸信，まされる寶子に如かめやも ―『ヘンゼルとグレーテル』(KHM15)の深層心理学的解釈，鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集，56，2002
6）太田隆士，『グリム童話』と日本の昔話の比較：『ヘンゼルとグレーテル』・『手なし娘』，駿河台大学論叢，31，17-32，2006
7）大島浩英，『グリム童話集』初稿，初版，第 7 版における「ヘンゼルとグレーテル」の変化について，大手前大学論集，10，53-67，2010
8）マリア・タタール著，鈴木晶ほか訳，グリム童話　その隠されたメッセージ，新曜社，1990
9）山本光雄訳，『イソップ寓話集』，岩波文庫(赤)，1942，1974 改版
10）アイソーポス著，イソップものがたり 1 年生―解説と読書指導つき（学年別・幼年文庫），偕成社，1982
11）渡浩一，イソップ寓話「アリとキリギリス」の日本的変容 ―『イソポのハブラス』における改変をめぐって―，明治大学国際日本学研究，６，59-74，2014
12）ルソー著，今野一雄訳，エミール（上），岩波書店，1962
13）滑川道夫，桃太郎像の変容，東京書籍，1981
14）柳田國男，桃太郎の誕生，三省堂，1933
15）出口寿々，英雄はいかに作られたか：『桃太郎』『将軍』からみる芥川龍之介の戦争観，玉藻フェリス女学院大学国文学会，55，72-87，2021

指導教員：家政学研究科児童学専攻岡本吉生教授